

ケース 12.3 ファデラ・アマラと移民女性の生活改善運動

国際移民とその子孫たちの参加あるいは代表形態はさまざまな形をとる。ファデラ・アマラ (Fadela Amara) が進めた運動は、2005 年と 2007 年の暴動を引き起こした移民系の若者が多く住むバンリュウでの女性への暴力と、女性への支配をなくし女性の生活を改善しようとするものであった。

フランスの多くの移民と移民系の人々は、かつて都市計画のもとにつくられたものの、現在では数々の社会的病理現象に取り憑かれ、荒れ果てた郊外の住宅に住んでいる。さらに加えて、大きな問題となったのは、このような環境下で若い男性が、同年代の女性に対して暴力を振るう事件が増加していることである。集団による輪姦、自宅軟禁、強制帰還、強制結婚、処女の強制、家族の威信を傷つけ恥をかかせたとみられる若い女性の殺人など恐ろしい事件が 1990 年代に増加したのである。使命感に燃えた 1 人の女性による、郊外の移民系コミュニティにおける社会変化を起こそうとする活動が、多くの移民女性の生活を向上させることになった。

ファデラ・アマラはアルジェリア移民でムスリム系の両親のもとに生まれ、90%の住民がアルジェリア移民で構成される郊外で育ったが、同時に都市計画によりできた郊外が荒廃し、第 3 世代の人々に悪影響を与える様子を見てきた。2002 年 10 月、移民の集まるゲットーに住む、当時 18 歳だったムスリム女性ソアーナ・ベンジアーナ (Sohane Benziane) が、地元のギャングに焼き殺されるという事件が起きた。この事件はフランスのメディアによって全国に伝えられ多くの人々の注目を浴びたが、アマラのような行動的な移民系女性たちは移民たちのゲットーでコミュニティ・グループをすぐに形成して対応しようとした。彼女らが発見したのは以下のような事実だった。

……拡大する暴力、社会崩壊、ゲットー化の進展、偏狭な政治行動への後退、民族的・性的差別、伝統への執拗な回帰、処女神話への妄執、割礼や一夫多妻制の普及などがアフリカ系移民コミュニティに蔓延しているという事実であった (Amara 2006: 111)。

彼女らが採用したスローガンは「売女でもなく、忍従の女でもない (Ni Putes Ni Soumises)」*であったが、それは、女性の品性を貶めるような扱いはもはやできない、女性は戦う、ということを示すために採用された。アマラは緊急の行動計画を立て他の 7 名の女性とともに、「郊外女性の平等を求めゲットー化に抵抗するための行進」を組織して 2003 年 2 月 1 日より行進を開始し、フランス全国 23 カ所を回り、多くの共感者を生みだして行進は成功裏に終わった。彼女らの行く先々では女性参加の拡大と女性の結束が生みだされ、承認を受けたのであった。アマラたちが望んだのは、この行進に対して多くの移民系若者男性たちから共感を得ることだったが、多くの若者男性は喜んで受け入れた。行

進の参加者たちは、この男性たちの多くは、その社会環境の産物であり、そして彼らも援助を必要としている人々だということに気がついた。

国際婦人の日に合わせた最後の行進が、2003年3月8日にパリで行われたときは、3万人ほどの人が集まり、そのなかには老若男女、ムスリム、キリスト教徒、超党派の人々が参加していたので、行進は大いに成功したとあってよい。議会のメンバーや首相がアマラと面会した。そのとき、アマラは5つの政策を提示して国内の女性を救うよう要請した。

若い男性向けに、女性を敬うように教育するための指導要領を作成すること。若い女性避難者のためのシェルターを早急に設置すること。男性の暴力の犠牲者である女性を救うための特別収容センターを組織し、そのなかに警察署を配置すること。特別な近隣相談室を設置し、女性が駆け込んできたとき適切なアドヴァイスを受けられるようにする。こうしたプロジェクトで働く女性オーガナイザーを育成するために、「売女でもなく、忍従の女でもない」運動による教育プログラムを公刊する。

すべてのプログラムは、何らかの形で政府の政策に採用されたので女性の地位向上のためのプログラムは改善され、いまでは全国で「売女でもなく、忍従の女でもない」運動グループの人々が活躍している。

熱心なムスリムであるアマラは、宗教の重要性を確信しているが、同時に、好戦的な女性解放論者であるアマラは、女性の平等と安定した生活を達成するための手段は世俗的な社会においてのみ入手できるものだとも考えるようになった。しかし、フランス政府が採用した宗教シンボルの着用を公立学校で禁じる法律は、後に「スカーフ禁止法」として知られるようになったが、同法は世俗化を促進するものだったにもかかわらず、とくに排斥主義者により法律の施行対象とされ、否定的な烙印を押されたムスリム移民系住民の間に逆効果を生みだした。アマラの目には、フランスのすべての住民に経済機会を平等に与える政策のほうが、より寛容性を育てるために必要ではないかと映ったのである。

2007年に、中道右派に属すニコラ・サルコジ大統領は、アマラを閣外相の都市問題省担当大臣に任命した。他にも2人のアフリカ系ムスリム移民の女性も任命されており、これはフランスの増大する文化的多様性を反映した人事であるといえよう。2008年、アマラは、長い間待ち望まれていた計画策定にあたり重要な役割を果たすことになったが、それは2005年と2007年の全国的なフランスの暴動の原因となった諸問題の解決を目指すものであった。

【参照文献】

Amara, F., Zappi, S. and Harden Chenut, H. (2006) *Breaking the Silence: French Women's voices from the Ghetto* (Berkeley: University of California Press).

ケース 12.3 ファデラ・アマラと移民女性の生活改善運動

*訳注：アマラは第3次フィヨン内閣では閣僚に任命されていない。なお、Amara, Fadela (2004) *Ni Putes Ni Soumises* (Paris: La Decouverte Editions) は、日本語に訳されているので（ファドゥラ・アマラ『売女でもなく、忍従の女でもなく——混血のフランス共和国を求めて』堀田一陽訳、2006年、社会評論社）参照してほしい。